
G I F T ・ 雅弘編

菱加賀えり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G I F F T ・ 雅弘編

【Nコード】

N 9 8 0 5 E

【作者名】

菱加賀えり

【あらすじ】

「G I F F T」を雅弘の目線で書いていきます。雅弘の玲香への気持ちはどんな風変わったのか？いつから愛が芽生えたのか？

プロローグ

僕は、忙しく毎日を過ごしていた……。

それは、言い訳だったのかもしれない。

「忙しい」という言葉で何もかもを片付けて、逃げてしまおうとしていた。

周囲の目を気にしながら暮らす生活。

何か行動を起こそうとしても、それも簡単には叶わない。

そんな毎日に嫌気がさしてきていたことは、紛れもない事実だった。

僕は誰にとって大切な存在なんだろう？

僕は誰を愛せばいいんだろう？

沢山の人たちに囲まれ、愛想笑いの中で、それに合せて過ごす毎日。僕の中で、疑問が生まれていた。

そして、疲れていた。

自分に正直に生きること。

僕は、それを見つけようとしていたのかもしれない。

そして、君に出会うことで、それを見つけることができたんだ。

1・仮面

今日は朝から、何となく気だるい感じで目を覚ました。

昨日までの仕事の疲れが出たんだろう。

テレビや雑誌の仕事は、事の外疲れが溜まる。

カメラマンや記者達の言いなりになり、自分とは違う仮面を被り、別人を演じる。

きっと本当の僕を知る人など、ほんの一握りの人たちだけだろう。仮面を被った僕を、世の中の人たちは、本当の僕だと思っている。「違う！！」と叫んでみたところで、誰かに届くわけもない。

何度か瞬きをしては、窓から見える景色が変わらないかと思っていた。

「パパ。あさだよ」

息子の声で、張り詰めていた空気は一気に柔らかい、僕はいつもの僕に戻る。

「おはよう。敬音」

息子は僕になつこり笑うと

「おさんぽ。おさんぽ」

とせがむ。

その姿が可愛くてたまらない。

仕事で家を開けることが多い僕は、家にいるときはなるべく息子と一緒に時間を大切にしたいと思っている。散歩もその中の一つだ。

「まーくん。敬音がまた駄々こねて困ってるんだけど、行ってくれる?」

妻はそう言つと、ちゃっかり玄関に敬音の靴を出し、ささっと履かせる。

僕は、その手際のいい様子をじつと見ながら

「しかたないなあ・・・」

そう言つて、下駄箱から靴を出した。

「それじゃ、いってらっしゃい」

妻はそう言つと、軽く手を振り、家の中へと入っていった。

「ばば、わんわんみにいこうよ」

もうすぐ3歳になる敬音はずいぶんとしゃべるようになって、可愛さも増してきた。

今の時間に散歩をすると、近くのペットショップの犬達の散歩と出くわすことになる。

敬音は、それがお目当てらしい・・・。

僕は結成20年のバンドのボーカルをしている。

自分で言うのもなんだけれど、そこそこ有名だ。

もちろん、息子にはそんなことは関係ない。

散歩に行くことも、誰かと会うことも、お構いなしだ。

でも、妻は違う。

僕の妻になつてからというものの、外に出るときには、時間をかけて

化粧をし、愛想笑いを振りまかなくてはならない。

それが嫌なんだろう・・・。

あまり外に出たがらない。

そんな妻の気持ちもわかる。

僕だつて同じなんだから・・・。

歌が好きで、ギターが好きで、何となく始めた音楽だった。

そこに友達が集まって、いつの間にかバンドという形ができた。そして、気がつくくと、テレビのカメラの前で僕達は歌っていた。

両親は、それを心から喜んでくれた。

僕も、ちやほやされることに有頂天になっていた。

夢を掴むって言うことは、簡単なことなんだと、天狗になっていた頃もあった。

そして、今は少し疲れていた。

新しいものを生み出すということも、大きな看板を背負っていくということにも……。

2・僕と息子

今週は仕事を入れずに、全てオフの予定だった。

家でゆっくりして、家族サービスもしたい。

何よりも、無理して作り笑いをしなくてはならない、テレビに出ることは極力避けたい。

言いたくないことを言わされて、それでも笑っていなければならぬい。

僕はいつも笑っているわけじゃない。

悲しいときも、悔しいときも、機嫌の悪いときもある。

でも、それを表に出すことができない。

仕事だから……。

今でこそ、テレビ局からのオフアームも新曲が出たときくらいになったが、昔はそうじゃなかった。

事あるごとにテレビに出ては、やりたくないこともやらされた。

それがテレビって世界なんだと、諦めもした。

自分達を売り込むために、通らなくてはならない通過点だったんだ。今こうしていられるのも、あの時があったからだと思ってはいる。

でも、やっぱり苦痛であることには変わらない。

言い方は悪いけれど、それから逃れる為に、家族サービスにかこつけて、オフをとる。

もちろん、家族が大切であることは事実だ。

でも僕は「Love Material」のボーカルである前に、五い
がらしまなこ

十嵐雅弘というただ一人の人間だ。
普通の人と同じように育ち、同じように生きて行きたい。
そんな些細なことにプライドを持って生きている。

メンバー達も同じように思っていてくれるから、それが救いだ。
結成して20年にもなるけれど、よく言われる『解散の危機』とい
うものは、今のところありえない。

「おはようございます。今日もお天気いいですね」

お隣の奥さんは、いつも決まってこの時間に玄関の掃除をしている。
僕は少しはにかみながら

「そうですね」

そう言つて、敬音の手を引き散歩に出発する。

それがオフの日の日課だ。

子供は少し見ない間にも、どんどん成長していく。

『はいはいができた』とか『立ち上がった』とか、どんどん目に見
える変化を見せてくれる。

それが楽しくて、嬉しい。

親というのはこういう些細なことを喜びにしているのだろう。
だから、敬音との時間は僕にとっては、本当に大切な時間だ。

「ぱぱ、きょうそうするよ」

敬音のキラキラした目を見つめっていると、愛しくてたまらなくなる。

「じゃ、よーいドン……」

僕の掛け声に合わせて、少しふらつきながらも、走り出す敬音の姿を
いつまでもめに焼き付けていたいと思った。

3. まーくん

今日は、朝からレコーディングに入る。

家の前では、車のエンジンの音が低く響いていた。

僕はさつと身支度を済ませ、妻に声をかける。

「悠美行ってくるよ。順調に終われば、3日くらいかな？予定はまた連絡入れるから」

妻は黙って頷いて

「いつてらっしゃい」と手を振る。

妻は毎回同じように繰り返される会話に、少し飽き飽きしてきているのかもしれない。

「敬音のことよろしくね」

「わかってるよ。まーくんもがんばってきてね」

いい年を越えて『まーくん』なんて、多少恥ずかしいが、それも僕達が若くして出会って、一緒になったという経緯があるからだ。

もともと、彼女は、ドラムの北澤の彼女だった。

僕たちの練習にいつの間にか一緒に来るようになり、そして、いつの間にか僕の彼女になっていた。

北澤という男は、二股をかけるのが好きなやつだった。

それを『つまみ食い』とよく言っていた。

北澤は自分に言い寄ってくる女の子を拒まない。

それが結果、本命だった悠美にバレてしまい、僕が悩みを聞くうちに、こうなっていた。

北澤はかなり落ち込んでいたが、悠美の気持ちが変わることはなく、結局は、自ら身を引くことを選んだ。

今でもあいつが一人でいるのは、悠美のことが引つかかっているからなのか、それとも、もっと遊びたいのか……。

それは、わからない。

僕は、まだ布団の中で小さくなって眠っている、敬音の寝顔を確認して、玄関を出た。

そして、車に乗り込みスタジオに向かった。

4・Love Letter

スタジオに入ると、既にメンバー達は、作業に取り掛かっていた。

ドラムの北澤誠は、ドラムの調整をしながら、僕の顔を見てにんまりと笑った。

「おい、このレコ終わったら、長期休暇にしないか？俺、旅行にでも行きたいんだよね」

こいつはいつも突然なことを言ってくる。

「僕にいわれてもな。それはみんなで話せばいいんじゃないの？」
少し冷たくあしらってみる。

「はいはい。さっさとやっちまおうぜ」

北澤はそう言っつて、また黙々と調整を始めた。

スタジオ内では、ギターの前山雄太・キーボードの林原義孝・ベースの中島陽一が既に打ち合わせを始めていた。

「ごめん。遅くなっちゃったね」

僕がそう言っつと

「いいよ。打ち合わせははじめよっか。北澤呼んできてよ」

林原が手を合せて僕に挿んだ。

北澤は、マイペース過ぎるところがあるから、少し扱いにくいところがある。

僕は北澤担当で、いつも面倒を見させられる。

「おい。北澤！！打ち合わせ始めるぞ」

「ほーいー！！」

北澤はそう言っつと、スティックをそつと置き、僕たちの元に歩いてきた。

「今回のシングルはドラマの主題歌になる予定だから、頼んだよ」
マナージャーが僕たちの気持ちを高ぶらせようと、活を入れてくれる。

「わかってるよ」

林原がそう言うと、みんなは顔を見合わせた後に黙って頷き、お互いで確認をし合った。

レコーディング中は、一人のミュージシャンとして・アーティストとして僕は自分の世界に入り込む。

出来る曲を聞いてくれる人。

どんな状況で、聞いてくれるのか僕には想像はつかない。

ただ、一人一人の心のどこかに、かすかに響いてくれればそれでいいと思っっている。

- - - - - Love Letter - - - - -

この思いが遠く離れている

かけがえのない君に届きますように

共に同じ時間を過ごしながら

君の悲しみも喜びも

一緒に感じあえる

そっとう風になれるかな

わがまま言ったり

喧嘩をしたり

共に過ごす時間の全ての中から

些細なことを生きがいにして

君と一緒に生きてゆきたい

愛してると何回言っても
言い足りないくらい

四六時中

君のこといつも思うよ

そうこれは君へのラブレター……………

思い出の波に包まれながら
君の中を溺れるように
一人でもがいていた
僅かな温もりを求めた

立ち止まらずに
真っ直ぐ前に

共に立ち向かう時間の中で
愛することが希望と信じて
君と一緒に生きてゆきたい

胸の中の愛しさと共に
君の顔を焼き付けながら

四六時中

君のこといつも思うよ

そうこれは君へのラブレター……………

予定通りにレコーディングは終了し、僕達は、それぞれの住む場所
へと戻っていった。

5・なんだか違う

家に帰ると、また同じように時間が流れていく。

同じことの繰り返しで、多少飽きてきているのかもしれない。

僕は、その中で敬音の成長を感じることで、自分の存在をしっかりと確認しているようだった。

悠美との買い物も、敬音との散歩も、僕にはどれもがかけがえのない出来事のはずなのに、なんだか違うような気がしていたのも事実だった。

それは僕だけが思っていることなんだろうか？

それとも3人がそれぞれに思っていることなんだろうか？

しばらくして、新曲のプロモーションの為にテレビの仕事が入ったと連絡があった。

まだ出来上がって間もない曲で、発売前だというのに、ドラマの主題歌ということもあって、曲側もかなり力が入っているようだった。

（北澤は休みが欲しいと欲していたけれど、大丈夫だろうか？）

7月には入れは、新曲を引っ連れて、ツアーも始まる。

（あいつの休みというのは、どのくらいのことなんだろうか？）

いろんなことを考えながら時間を過ごす、そう長くは感じない。

僕はリビングのソファの上で、悠美が洗う食器が奏でる音を黙って聞いていた。

それは、軽快にリビングまで届き、とても心地いい音楽に聞こえる。

「ねえ？」

僕は悠美の顔が見たくなって、声をかけた。

「なに？まーくん？」

そう言うと、悠美はまた軽快な音楽を奏で始める。

「ツアーに入る前に、どっかいかない？気晴らしにさ」

僕の誘いに、悠美は返事をしなかった。

「嫌だった？嫌なら別にいいんだけどさ」

悠美は僕の返事を聞くと、キッチンから駆けてきた。

「嫌じゃないんだけどね。逆に疲れちゃうと思って」

「そっか……。敬音も家にばっかりじゃ、息が詰まっちゃうと思っただんだ」

悠美は僕の言葉を黙って聞き終えてから

「まーくんの一番は、敬音なんだもん」

少し頬を膨らませて、拗ねて見せた。

「拗ねないで。僕の大切な奥様」

僕は悠美のご機嫌を伺いながら、話を終わらせようとしていた。

6. プレゼント

それから1週間。

僕は毎日同じように時間を過ごしていた。

今日は、朝からの雨で、敬音を散歩に連れ出すこともできなかった。

僕はソファアーの上で大の字になって、天上を見上げてみる。

(何か浮かばないかな?)

今日は、いいフレーズも浮かびそうにない。

敬音は、リビングにこれでもかという位におもちゃを広げ、一人で黙々と遊んでいる。

僕は、それを横目に、ダイニングへ移動した。

ダイニングでは悠美が、朝食の後片付けをしていた。

「ねえ。こないだの話考えてくれた?」

僕は、悠美の手を止めないように、そつと呟いてみる。

「あの話? 本当に大丈夫なのかな?」

悠美は、不安を含ませた笑みで僕を見た。

「大丈夫だよ。敬音だって喜ぶから」

僕は、その不安が少しでも軽くなるように、穏やかな顔を作り、悠美を諭した。

「仔犬がきたら、僕のいないとき、敬音に散歩をせがまれることもなくなると思うしね」

もうすぐ、敬音の3歳に誕生日だ。

そのプレゼントは何かいいかと、悠美と前から話していて、僕は仔犬をプレゼントしようと思案した。

悠美はまだ早すぎると、心配していた。でも、僕が家を開ける日にも、敬音は悠美に散歩をせがんでいる。悠美はそれが苦痛なようで、僕が家に帰るたびに愚痴をこぼす。このプレゼントは、敬音の為でもあり、悠美の為でもあるんだ。

「でも、動物を飼うってそんな簡単なことじゃないでしょ？」
悠美の言うことも分かっている。

「大丈夫だよ。もちろん僕がいない日は、悠美にも少し手伝ってもらうことになるけど……。でも敬音が喜ぶと思うから」
悠美はしぶしぶ頷くと

「私は少し手伝っただけだからね」
そう言っつて、汚れた食器をキッチンへと運んでいった。

僕は、ダイニングチェアに座り、悠美の行動をじつと観察する。

「コーヒー飲む？」
「うん」

悠美はそう言っつと、手際よくコーヒー豆を挽き始める。

僕はそれを見届けると、携帯を取り出して、ペットショップに連絡を入れた。

「もしもし、五十嵐です」

「いつもありがとございます」

腰の低い店長は、いつもこんな調子で電話に出る。

「こちらこそ、いつもお世話になってます」

店長は僕の返事を聞いてから

「あ……。例の仔、今必死で探してますので、もう少しお待ちいただけますか？」

そう言っつて、僕の返事を待った。

「うん。本格的にお願いします。一応、女の子で……」

「はい、分かっています。見つかりましたら、またご連絡いたします」

悠美は僕の電話の内容を静かに聞きながら、テーブルの上にコーヒ
ーカップを差し出した。

「息子の誕生日のプレゼントなんで、間に合うようにお願いしま
すね」

「はい。一番可愛い子を探しますから、もう少しお待ちください」
「よろしくね」

僕は電話を切ると、悠美の入れてくれたコーヒーをゆっくりと飲み
干した。

7・仕事

今日は、テレビの仕事が入っているからか、朝から少し憂鬱だった。

歌を歌うことは僕の天職だと思っている。

誰かの心に少しでも響いてくれたなら、僕はそれで満足だ。

歌っている時は、本当に幸せに浸ることができる。

ただ、15年以上もテレビに出てきた筈なのに、作り笑いをするこ
とだけは苦手だ。

特に今日は、生番組と言うこともあって、朝から気持ちが悪くない。

「まーくん、今日仕事だったよね？ご飯先食べてるね」

悠美はそんな僕を気遣ってくれているのか、いつものように明るく話しかけてくれる。

「うん。11時くらいには帰るから、先寝ててもいいよ」

「わかった」

今朝はあいにくの雨で散歩に行くこともできなかった。

僕は敬音とじやれるようにしながら、身支度を済ませる。

「パパ。あした、おさんぽいく？」

「そうだね。雨も止んだし、明日は晴れるかもね？晴れたら行くこ」

「うん」

敬音は、珍しく素直に返事をしてから、寝室からリビングに向かって。

僕は、敬音の後を追うようにして、駆けてみる。

「敬音。今日はとってもおめでとうだね」

思いつきり、頭を撫でると、敬音はにんまりと笑ってくれる。

「今日はパパお仕事だからさ。ママと一緒にお利巧にしてってくれる？」

「いいよ」

敬音は軽く僕に返事をしてから、リビングのおもちゃを一齐に広げた。

僕は、その様子を確認してから

「それじゃ、行ってくるね」

悠美に聞こえるように大きな声を出してから、玄関に向かった。

「いつてらっしやーい」

悠美はキッチンから大きな声で僕を送り出した。

局に到着し、控え室に入ると、北澤以外のメンバーは全て揃っていた。

「お疲れ。北澤は？」

林原の言葉に、一瞬不安がよぎる。

(まさか、来ないことはないだろうけど・・・)

口には出さなかったけれど、メンバー達も同じように不安を感じていたようだった。

控え室に入ってから、すでに2時間が過ぎていた。

北澤の携帯に連絡を入れてみたけれど、一向に出る気配はない。

バンド結成以来の大ピンチだ。

メンバーは刻々と過ぎていく時間の中で、ただ黙って北澤が来るのを待っていた。

その時

「ういっす」

聞きなれた声がしてドアが開いた。

「遅くなったな。さっき東京に戻ってきたからさ。これでも急いだんだぜ」

北澤はそういいながら、額の汗をさつと拭った。

「おいおい。頼むよ。北澤がいないと始まんないだろ？」

そういう事で、僕は安堵と憤りの入り混じる気持ちを、落ち着かせた。

「ほんとわりい。間に合っただろ？」

相変わらず、能天気な北澤に、これ以上かける言葉が見つからなかった。

他の3人もきつと同じように思っていただろう。

それから、簡単にリハーサルを行い、僕達は時間通り番組に出演することができた。

司会の森田モンタは、15年以上同じ番組を続けている。

僕も、彼には信頼を寄せている。

口下手な僕のことを分かってくれているのか、上手く話を合せてくれる。

「今日の曲は、まだ発売前の曲を聞かせてくれるということだ……」

「はい」

メンバーも僕も、いつもそんな返事をするだけだ。

「どういう人たちに聞いてもらいたいですか？」

「一生懸命に恋をしたり、一生懸命に何かに挑戦したり、そういう人は見ていていいなあと・・・」

「そうだね。これはラブソング？」

「ん・・・。ラブソングなんだけど、でもそうじゃないような・・・」

「じゃあ、どんな感じ？」

今日の森田氏はなんだか意地悪な子供のようになり、僕を攻め立てる。

「そうですね。言葉で言うのは難しくして」

「ドラマの主題歌なんだよね？」

「はい。そうです」

「で、どういう人に聞いて欲しい？」

「恋も、仕事も、スポーツも、いろんなことに頑張っている人。一生懸命がんばって生きている人の、背中を押すことができればと思って。一人つきりだと思っても、誰かがきつとどこかで見えてくれるはずだから・・・」

（何とか言えた！！）

「ありがとうございます。それでは期待して聞いてみたいと思います。スタンバイお願いします」

僕はその言葉でようやく落ち着きを取り戻した。

そして、無事に歌い終え、帰路に着くことができた。

僕は、今朝も日課をこなすため、玄関に出て敬音に靴を履かせていた。

悠美は半分呆れ顔で

「誰に似て、こんなにしつこい性格なんだろう・・・」
そう言うと、溜息をこぼした。

「敬音が楽しみにしてるんだから、そんなこと言わないの。僕だって結構楽しいんだから」

僕は、悠美を宥めて散歩に出かけた。

並木の桜は、蕾が早く咲きたいと言っているように、大きくなって膨らんでいる。

あと数日で、満開になるだろう。

僕は、じつと空を見上げながら歩いていた。

「パパ。わんわん」

敬音は一目散にお目当ての犬の元に走っていく。

「おはよう。ケイトくん」

3頭を連れて歩いている子は、あのペットショップの沙希という女の子だ。

子供が好きなのか、いつも敬音の相手をしてくれる。

彼女は、僕の存在を確認すると、決まって体を硬直させ

「おはようございます、五十嵐さん」

そう言って深く頭を下げる。

僕はいつものように

「おはよう」

というとにっこり微笑んでみる。

彼女にとって、ここにいる僕と、ブラウン管の中にいる僕は、同じ五十嵐雅弘なのだ。
そのイメージを崩してはいけない。

「ケイトくん、パパとお散歩楽しいね」

敬音は犬に夢中で、彼女の言葉も聞こえてこないようだ。

「敬音。お姉ちゃん、お店に戻らなくちゃいけないだろう?」

僕はケイトを宥めて、犬たちの群れからそっと引き離れた。

「店長が、いい仔見つかったって言ってましたよ」

彼女の言葉に僕はまた、にっこりと微笑んで

「しーっ!!!」

僕は、人差し指を口の前に当てた。

「あっ!!! それじゃ失礼します」

彼女はそう言うと、また体を硬直させ、深く頭を下げて歩き出した。

9・遠慮

お昼過ぎ、僕の携帯にあの店長から電話があった。

「可愛い子が見つかりまして、お店に取り寄せてありますので、」
都合のいいときに見にきてください」

「そう。どんな感じの仔？性格とかはどう？」
仔犬を迎えることを楽しみにしているのは、敬音ではなく僕のほう
なのかもしれない。

「とつてもおとなしくて、可愛いですよ」

「そうなの？楽しみにしてるよ。明日にでも行けそうだったら、連
絡入れます」

「では、お待ちしております」

「じゃ、よろしくね」

僕はそう言つと、電話を切つた。

「悠美、いい仔見つかった見たいだつて。明日一緒に見に行かない
？」

ソファアの上で寝息を立てている敬音の横顔を見つめていた悠美は
「まーくんが見てきて。敬音には内緒なんですよ？」

「そつか……。じゃ、僕が決めちゃつてもいいの？」

「まーくんが一番嬉しいんじゃないの？どうぞ。でも、ちゃんと見
極める力あるのかな？」

そう言つてからかう。

「僕は女の人を見る目はあると思うよ。こつして側に悠美がいてく
れる。ちがう？」

悠美は僕の肩を軽くポンポンと叩いてから

「ありがとう。まーくんがいなかったら、こうして幸せな家族をもつこともなかったと思うの」
神妙な顔でそう言った。

「あいつのことはもういいだろう。許してあげなよ」

「そうじゃないよ。許すとか、許さないとかそういうことじゃない。逆に誠には感謝してる。こうしてまーくんと出会わせてくれたこと」「そっか……。僕はあいつに少し遠慮してるのかもしれないね。もう終わってることなんだけど、あいつの性格を考えると、ちよつと考えちゃうかな？」

悠美は僕の言葉に驚いた顔をして、咄嗟に立ち上がった。

「そんなことずつと考えてたの？もう、終わったことだし。私が浮気されちゃったてことは、誠から見て、私には魅力がなかったんだと思うの。だから……」

「ごめんね。なんか変なこと言っちゃったね。コーヒー入れてくれる？」

「いいよ」

僕は、どんよりとした空気を変えようと、悠美をキッチンに向かわせた。

そして、僕も後を追うようにしてキッチンへと向かった。

10・優しい光

今朝も、朝早くから敬音に散歩をせがまれ、僕は二人で家を出た。

外は本格的に春が来たように、温かな風が、春の匂いを運んでくる。

並木道の前まで来ると、敬音は、つないでいた手を離し、春の風と一緒にになったように、軽やかに駆け出した。

僕は、穏やかな気持ちになって、その姿を後ろから追いかける。

ずっと先のほうには、ペットショップの犬達が散歩に来ているのが見えた。

手綱を引いているのは、いつもの女の子じゃないみたいだ。動きが何となくぎこちなく、3本の手綱が絡みそうになっている。

「あつ。転ぶ!!」

僕は、咄嗟に声を出したが、聞こえるわけもない。

その人の横顔は、春の光に包まれて、見ている僕を優しい気持ちにしてくれる。

「あつ、わんわん」

敬音は犬を見つけ、スピードを上げて追いかける。

僕もそれを追うようにして、スピードを上げた。

「ぼく、ワンワン好きなの？」

その人は、にっこりと微笑み、敬音の前にしゃがんでそう言った。

「敬音!!」

僕はその人を正面から見たくなり、大声を出して呼んでみた。

「すみません。息子をご迷惑かけてませんでしたか？」

優しい笑顔で、その人は僕の顔を見た。

「いいえ。大丈夫ですよ」

僕は額に汗をかきながら、言い返す彼女の姿に、なぜか目が奪われた。

「あの。いつもお散歩してる人じゃないんですね」

「すみません。私新入りなんです。今日からお仕事させていただくことになって」

「そうだったんですか。大変でしょうけど頑張ってくださいね」

「ありがとうございます」

彼女は僕のことを知らないのだろうか？

普通の人なら、変にペコペコと愛想を振りまき、僕に近付こうとしてくるはずだ。

「僕、あそこのお店たまにお邪魔してるんですよ」

僕は彼女の反応を見ながら、話し続けた。

「敬音が、息子がね、犬が欲しいって言うんだけど、なかなかいい子に出会えなくて」

「そうですね……。いい仔に会えるといいですね」

空から射す木漏れ日のような、柔らかな笑顔だった。

「ときどき敬音をつれて散歩していると、こうしてこの子達に会うことができて」

彼女は何も言わず、黙って僕に視線を合せて頷いた。

「また会えるといいですね」

僕の口からは自然とそんな言葉が飛び出した。

そして、僕はゆっくりと彼女にお辞儀をし、敬音の手をとった。

彼女はにっこりと微笑んでから、すっと立ち上がり、お店のほうに
向かって歩いていった。

僕は、彼女の後姿を見えなくなるまでずっと見つめていた。

11・同じ目

僕は、彼女の姿が見えなくなると、何ともいえない喪失感に襲われた。

(この気持ちは何だろう?)

自分で自分の気持ちをコントロールすることができない歯痒さに、僕は戸惑いを隠せなかった。

家に戻ると、悠美は鼻歌を歌いながら、リビングで掃除機をかけていた。

「今日は早かったのね。そろそろ敬音も飽きてきた?」

一旦休めていた手を再び動かしながら、僕に言った。

「そんなことないよ」

僕は悠美の動きを観察しながら、リビングのソファに腰を下ろした。

「ここ邪魔かな?」

「そうね。ちよつと邪魔かな?」

僕は悠美の仕事を邪魔しないように、ダイニングへと移動した。

ダイニングから吹き抜けた天上では、空調のプロペラが忙しそうに回っている。

僕はそれを眺めながら、彼女のことを思い出していた。

(どうして、僕だということ気付かなかっただろう?)

不思議と淋しい気持ちにさせる。

(気付いているのに、気付かないふりをしていたのかな・・・)

僕は、ペットショップへ向かう時間を早めようとお店に電話を入れ

た。

彼女のことを気になって、真相を確かめたいという気持ちもあったからだ。

「はい、ペットショップ「プチ」です」

彼女が電話に出るのかと思ったが、その声はいつもの店長だった。

「今日、伺おうと思うんだけど、これからでも大丈夫かな？」

「はい。わかりました。お待ちしています」

「じゃあ、後で伺います」

僕はそう言つと、携帯を閉じた。

「今から、見に行つてくるよ」

僕はリビングに向かい、悠美に伝えると、何かに急かされるように家を出た。

家からお店までは10分くらいかかるだろうか……。

何故だろうか？

いつもの通いなれた道が、今日はとても遠く感じた。

お店の前に着くと、窓越しに、彼女が楽しそうに店の片付けをしている姿が見えた。

僕は、駆け込むようにドアを開けて、中に入った。

そして、真っ先に彼女に視線を合わせ

「さっき会ったばかりなのに、また会っちゃったね」

そう言つと

「店長さんいる？」

僕は奥のほうを覗き込んでこう言った。

「今呼んできますね。お待ちください」

「よろしくね」

僕は軽く頭を下げて、彼女に手を振ってみた。

小走りで駆け出す彼女の後姿は、なんだか可愛らしく、いつまでも見ていたくなる。

(今日の僕は、どうしちゃったんだ?)

店長は僕の姿を見るなり、仔犬をもって走ってきた。

「どうですか?」

そして僕の様子を伺うように仔犬を差し出した。

「かわいいなあ。この仔」

仔犬はほんとうに小さくて、僕の掌のうえにおさまってしまうほど小さい。

まん丸の目が、僕に何かを訴えかけているようだ。

「ウチ来る?」

僕は思わず小さな声で問いかけた。

(この目、どこかで見たような・・・)

ふと横を見ると、彼女の目が僕の様子をじっと見ている。

(同じ目だ!!)

(決めた!!ただ、あんまり即決だと、少し面白くないかな?)
そう思った僕は、少し悩んでいるふりを試してみた。

「決めた。この仔でお願いします」

そう言うと、仔犬の顔をもう一度見つめた。

「ウチのやんちゃ坊主に踏んづけられないようにしないとね」
小さな仔犬の頭をそっと撫でた。

店長は、にんまりと笑い、彼女を僕の前に差し出した。

「今日から新人さんがきてくれることになりました」

「うん。さつき会ったよね」

僕は、初めてでないことを強調するように、彼女に軽くウインクを試してみた。

「はい」

「松本 玲香ちゃんです。またよろしくお願いします」

「玲香ちゃんか。かわいい名前だね」

僕はそう言うと、仔犬を持ち上げ、

「かのん？れおん？どっちがいい？」

彼女に聞いてみる。

「どっちもかわいいですよ」

そう言うと

「れいかちゃんは漢字でどうかくの？」

彼女は少し戸惑ったような表情を見せたが、

「おうへんのれいに、かおるです」

とだけ答えた。

(玲・香か……。可愛い名前だな。)

僕はなぜか彼女との繋がりが欲しくなって、仔犬の名前に彼女の名前を一字頂くことにした。

「じゃあ、香音^{かおね}で、カノンに決定!!」

そして、子供を高い高いするように、仔犬を持ち上げた。

「カノン。五十嵐カノン。いいんじゃない？」
そう言うと、僕は彼女の反応を見た。

「でも、私なんかの名前を取っちゃったら、変な子に育ちますよ」
「そうなの？平気だよ。今日君に会って、一生懸命な姿を見て、なんだか胸を打たれんだ」

「この仔も、玲香ちゃんみたいな女の子になってくれたらって思ったから・・・」
こんな展開になっても、彼女はごく自然に僕に接している。

「五十嵐さん。ナンパはいけませんよ」
店長は僕の顔を覗き込んでそういった。

「ちがうよ。僕は妻子持ちですから」
僕は一瞬、おかしな気持ちになりそうだったが、そう言って店長の言葉をはぐらかした。

「でも、一生懸命な人って、見ていてすごく気持ちよくて、応援しなくなっちゃうでしょう？」

「そうですね。本当に玲香ちゃんは一生懸命がんばってくれています」
確かに彼女は張り詰めたように一生懸命な顔をする。
そして、それが解けたとき、柔らかく優しい表情を見せる。

僕は見ているだけで癒されたような気持ちになった。

「それじゃ、お引渡しの日などを決めさせていただいてもいいですか？」

「うん。お願いします」
彼女は僕達の会話を聞き終えてから、奥へと入っていった。

「来週迎えにきたいと思います」
「わかりました。来週までは大事にお預かりいたしますので」

僕は店長にカノンを渡し

「前日には連絡を入れますから、よろしくお願いしますね」
そう言っつて、店の奥をそつと覗いた。
彼女が出てくる気配はない。

僕は、もう一度、奥を確認してから、お店を後にした。

12・報告

僕は、お店を出ると、真っ直ぐ家に帰るのがもったいなく感じて、あの並木通りに立ち寄った。

ぷっくりと膨らんだ蕾は『早く咲きたい』と僕に訴えかけているようだ。

(敬音と一緒にときは、ゆっくりと見ることもなかったな)

僕はジーンズの後ろのポケットに両手をつっ込んで、桜を見上げた。正面の大きな木は背伸びをしているように、真っ直ぐと枝を伸ばしている。

僕はそれがうらやましくて、少し嫉妬した。

自由でのびのびと、自らの命を輝かせている桜の木が羨ましかった。

僕は首が痛くなるくらい、木々を眺めてから家に戻った。

「ただいま」

玄関を開けると、悠美が駆けつけてきた。

「おかえり。どうだった？敬音まだ寝てるから」

敬音を起こさないように、小さな声で悠美は言った。

「すごく可愛かったよ。名前も決めちゃったし」

「え？名前？」

「そう、香る音で、カノン！！可愛いでしょ？」

悠美はそれを聞くと

「どこの女の子の名前？」

僕をギツと睨みつけた。

「違うよ。敬音・香音！！何か兄弟みたいで可愛くない？」
悠美はまだ少し疑っているようだった。

「嫌だからね。他に女の人とか！！許さないから！！」

「心配しないで。悠美だけを愛してるよ・・・」
ヒステリックになった悠美に一番効く魔法の言葉を言ってみた。

「本当に私だけ？信じていいの？」

「もちろん。僕には悠美以外は考えられないから」

僕は悠美の顔を眺めながらも、どこか遠くで彼女のことを気にかけていた。

そんな自分がとても不思議だった。

「今日はまーくんの好きなもの作ってあげるからね。何食べたい？」
悠美の言葉で、僕は現実に戻された。

「あ・・・。何でもいいよ。お任せします」

僕は慌てて話を合せた。

「まーくん？やっぱりおかしいよ」

「そんなことないよ。カノンが来たらどこにハウスを置こうかなって考えてた」

僕は適当な言い訳を考えて、それを吐き出した。

「もう・・・」

悠美はそう言うと、クルリと後を向いて、バタバタとスリッパの音を大げさに立てながら歩いていった。

(怒らせちゃったな・・・)

僕は慌てて靴を脱ぎ、悠美の後を追った。

「悠美、怒らないでよ」

悠美は振り返りもせず、キッチンへと向かった。

「悠美？」

「。。。。。」

「起こってんの？」

僕は悠美の背後に回り、優しく抱きしめ、首筋にキスをした。

「まーくん。敬音が起きちゃう」

悠美は僕の腕をさらりと振り解き、耳元に顔を近づけると

「あとでね」

そう言っつて、何事もなかったかのようにコーヒー豆を炒りはじめた。

「まーくんも飲むでしょ？」

「うん。もちろよ」

「じゃ、あっちで待ってて」

僕は悠美の指示通り、リビングのソファに座り、コーヒーが入るのを待っていた。

13・早足

眠い目を擦りながら、カーテンを開ける。

(今日もいい天気だな)

僕はなんだか嬉しくなって、窓を開けた。

「悠美、起きて。敬音と散歩に行くから、準備してくれない？」

悠美は、寝返りを打ってまた寝てしまう。

「ねえ、悠美。起きて……。お願い」

僕の言葉にようやく気がついたのか、悠美は重そうに体を起こした。

「今何時？」

「8時だけど……」

「今日も行くの？」

「うん。いけない？夏にはツアーもあるし、敬音と一緒に時間を大切にしたいんだ」

「……」

悠美はゆっくりとベッドを降りて、僕の顔を見つめた。

「敬音もいいけど、奥さんの方も気にしないと、いじけますから！」

悠美は澄ました顔で嫌味を言う。

「朝からそんな顔しないの。綺麗な顔が台無しだよ」

「嘘？」

悠美はそう言うと、鏡台の前に駆け込んで、鏡に顔を近づける。

「怖い顔してる。ごめんね」

その表情はいつもの悠美に戻っていた。

「敬音起こしてくるから、準備してくれる？」

「わかったよ」

悠美の返事を聞いてから、敬音を起こしに子供部屋に移動した。

僕は可愛い寝顔を見てやろつと、そつとドアを開けて、ベッドの上を見た。

(・・・え?)

ベッドの上に敬音の姿がない。

「パパ、おはよ」

「・・・」

敬音は、部屋の隅っこにおもちやを積み上げ遊んでいた。

「たかいよ。じょうずだよ」

得意気な敬音の顔を見て、僕は安堵した。

「敬音、今日は早かったんだね。お散歩いこうか？」

「うん」

敬音はにっこり笑った。

「片付けないの？」

「だめ!!ママもみるの」

「そつか・・・。じゃ、そつと歩いといで」

敬音は不自然に手を横に開き、静かに僕の元までやってきた。

僕は敬音を抱き上げ、階段を降り、リビングへと向かった。

「敬音、起きてたよ。一人で遊んでた」

僕は悠美に敬音を渡した。

「え？一人で？何してたの？」

悠美はそつと敬音を降ろして聞いた。

「あのね。たかいんだよ」

「なにが？」

「ママもみて」

悠美は黙って頷くと、敬音のパジャマを着替えさせる。

「はい。出来上がり！！」

悠美は敬音の頭を優しくぽんと叩き、僕の方に向きを変えた。

「いつてらっしゃい。帰ってくるまでに朝ごはんの準備しておくからね」

「うん。お願いね」

僕は、敬音と手をつなぎ、家を出た。

(・・・また会えるかな？)

僕は、彼女に会えるような気がして、早足で並木道へ向かった。

「パパ、わんわんいる？」

「いまなら、会えるかもね？」

敬音の楽しそうな顔を見ると、僕まで楽しくなる。

「急ごうか？」

「うん」

「じゃ、ヨーイドン！！」

敬音は僕の声に合わせて走り出した。

僕はしばらく敬音が進むのを待ってから、追いかける。

敬音は両手を広げ飛行機にでもなったつもりなのだろう。
かなりの蛇行運転だ。

時々、大きく伸びた桜の枝にぶつかりそうになる。

「敬音！！」

僕は、見ていられなくなって思わず名前を呼んだ。

「敬音。危ないだろ」

そう言つと、立ち止まる敬音はキョトンと僕を見た。

僕は、敬音からゆっくりと視線を前に戻した。

すると、彼女の後姿が視界に入ってきた。

「あれ？玲香ちゃんじゃない？」

僕は大きな声で彼女の名前を呼んだ。

「玲香ちゃん！！」

彼女は、僕に気がついて、ゆっくりと後ろを振り返った。

「はい、おはようございます」

少し距離があるからだろう。

彼女は、体を少し丸めて、大声を搾り出すように僕に答えてくれた。

「おはよう」

僕は、そう言いながら、彼女の側に駆け寄った。

「今日もお散歩？」

「はい」

彼女の少し鼻にかかった声が、僕の耳にゆっくりと響いた。

僕は彼女をもつと側で見たくなくて、もう一步近づいた。

「あのね」

「はい」

僕は、顔をすぐ側まで近づけて

「カノンのことは敬音には内緒だから、よろしくね」

そう言つて、ウインクしてみた。

彼女は恥ずかしそうにして、何も言わず俯いた。

「明後日、敬音の誕生日なんだ。だから、それまでは」

僕は両手を合わせて、彼女に頼んだ。

「わかりました。内緒です」

「そうそう。よろしくね」

「はい」

そう言つと、まだ飛行機になつたままの敬音の元へと僕は戻つた。

14・交通事故

(やっぱり、彼女のことを意識しているのかもしれない……。)

昨日僕は、彼女に会ってから、自分の気持ちにおかしなものが芽生えようとしていることに気付いてしまった。

妻がいて、子供がいて、年だって後数年もすれば40になる。

(何を考えているんだろう？)

僕は自分で自分が恥ずかしくなった。

頭の中は混乱し、ぐっすりと眠ることができなかつた僕は、朝の静かなりビングで一人、テレビから流れる、天気予報のBGMに耳を傾けていた。

画面は時々入れ替わり、今日の天気を知らせる。

でも、僕には今日の天気よりも、彼女のことが気になった。

彼女は、顔が特別綺麗だというわけではない。

もちろん、それなりに美人だとは思う。

でも、外見なら、悠美のほうが上だろう。

彼女より、綺麗で若い子なら、探せば沢山いるだろう。

でも、何かが違う……。。

内面から浮かび上がる、透明な儚さ、健気さ、素直さが僕の心を締

め付ける。

そして、彼女の瞳を思い出すと、僕はその奥に吸い込まれそうになって、自分を見失いそうになってしまふ。

(この不思議な気持ちはなんなんだろう?)

僕はこれまで味わったことのない想いを、自分で処理することができなくなっていた。

僕だってそれなりに恋もした。

沢山の女の子達にちやほやされ、阿呆になったように遊びまくった時期もあった。

それでも、悠美と結婚してからは、悠美一人を愛することを心に決めて生きてきた。

色々な女の人からの誘いもあったけれど、うまく断って逃げてきた。

(それが、今の僕は何を考えているんだろう?)

そんなことを考えながら、うとうとしていると

「まーくん、敬音がいないのー!!」

悠美の張り詰めた声で、僕はソファから飛び起きた。

「敬音がいないって?部屋にも?」

「どこにも居ないからいつてるんでしょ?」

「靴は?」

僕は悠美を落ち着かせようと、肩に手を乗せ、悠美の顔を覗きこんだ。

「靴も1足ないの!!」

「僕、外見ってくるから、悠美はここで待ってて。帰ってくるかもしれないでしょ？」

「わかった」

僕は携帯だけ握り締め、慌てて外に出た。

時間は既に8時を過ぎていた。
いつもなら、散歩に出かけている頃だ。

僕はまず、並木道へ出かけることにした。

もしかしたら、いつものように犬を見ようと、一人で出て行ったのかもしれない。

僕が寝ていたから、気を使ったのかもしれない。

僕は、様々なことを考えながら、並木の中を走っていた。

見覚えのある後姿に、僕は声を上げた。

「玲香ちゃん？」

僕は大声で叫びながら、彼女の隣で止まった。

「敬音見なかった？」

上がる息を必死で堪えながら、彼女に問いかける。

「敬音くんですか？ごめんなさい。見てないです」

「いないんだ。一人で家から出て行ったみたいなんだ」

僕は、彼女の返事につくりと肩を落とした。

「ごめん。急いでるから」

そっぴい残して僕はまた走り出した。

「五十嵐さああん」

遠くから彼女が僕を呼んだ。

「私、こっち探しますから」

僕は一旦立ち止まり、彼女のほうを向いて深く一礼をした。

何分探し回っただろうか。

敬音はどこにも見当たらない。

これ以上進んでいるとしたら、明らかに迷子になっているはずだ。

不安そうな顔をした敬音の顔が僕の頭に浮かんでは消える。

（早く見つけないと！！）

僕は再び走り回った。

何分くらいたっただろうか？

敬音の姿も、彼女の姿も一向に見つけられない。

この道を行けば、車の通りの多い大通りに差し掛かる。

不安は増すばかりで、僕はなきそうになりながらも、また走っていた。

曲がり角に差し掛かったとき、あのペットショップの犬達が、3頭、チヨコチヨコと歩いてこっちに向かって見えた。

僕は急いで近づくと、手綱をとった。

（なんでこんなところにいるんだ？彼女は？）

僕は、そのまま角を曲がった。

すると、彼女と敬音と一緒にいるのが見えた。

「敬音お！！玲香ちゃん！！」

僕は、逸る気持ちを押さえながら、二人に声をかけた。

「こつちです。敬音くんいました！！」

僕は彼女の声に、頷きながら駆け寄った。

「突然、みんな走ってたから、捕まえてきたよ」

そう言っただけは、彼女に手綱を渡そうとした。

「玲香ちゃんどうしたの？」

彼女の膝からは、血が出ていた。

「こんなのいいんです。私おっちょこちよいなんで」

そう言っただけは、彼女は敬音の背中を押して、僕の前に立たせた。

不安だったんだろう。

敬音の目には涙が溜まっていた。

「おねえちゃんがね。こうつうじこなんだよ」

敬音はそう言っただけは僕の右足にしがみついて、声を出して泣いた。

「敬音、交通事故って何？パパにちゃんと話して」

僕は、敬音の言った意味がわからず、詳しく聞こうと、敬音の前にしゃがんだ。

「おねえちゃんがね、ばいくとぶつかって、じゃんぷしたの」

僕はその言葉を聞いて彼女の膝をもう一度見た。

「血が出てる」

「ぼくね。おねえちゃんのわんわんにさわりたいだけなの」

僕は敬音の頭をそっと撫で、

「お姉ちゃんが敬音を助けてくれたの？」

敬音は黙って頷いた。

「敬音のために、こんな」

と言いかけ、僕は彼女の腕をそつとつかんだ。

「病院いこう。相手のバイクは？」

「私が一方的に飛び出したんです」

彼女は大きく首を振った。

そんな彼女の反応が、健気だった。

「ごめんね、すぐ病院に行こう」

嫌がる彼女の腕をそつと引いてみる。

「大丈夫ですよ。ほんとに」

「そんな訳ないでしょ？」

僕は彼女のそんなところが、愛しく感じた。

「本当ですよ。転んだだけですから」

彼女は、手を振って答えていたが、腕が痛むんだろう。

少し顔をしかめるようにしていた。

そして、その拍子に僕の腕が彼女から外れた。

「でも、こんなに血が出るし、病院行かないとダメだって」

僕は何とか病院に連れて行こうと、必死になっていた。

「僕と一緒にいくから、病院にいこう」

「私、お店にも戻らないといけないし、このくらい本当に大丈夫で

すから。それに、五十嵐さんが一緒に病院に行ったら、変な噂とか

流れると困ります」

少し強めの口調で言い返してきた。

僕はこれ以上彼女を説得しても、無理だと思い始めていた。

「じゃあ、お店に戻ったら、病院にちゃんと行って。心配だから。

お願いします」

僕は深く頭を下げ、慌ててポケットに入っていたペンとメモを出して、携帯の番号を書き写した。

「これ、僕の番号だから、病院に行った後、結果を知らせて欲しいんだ」

そして、その紙切れを彼女に差し出した。

「お店には僕から連絡しておくから。約束して。ちゃんと病院に行くって」

「はい。約束します」

彼女は僕を真っ直ぐに見てからそう言った。

「じゃ、お店に戻ります」

「ありがとう」

僕はもう一度頭を下げ、今度は敬音に辞儀を促すように、敬音の頭を後ろからそつと押した。

敬音はまだ泣いていた。

「おねえちゃん、だいじょうぶなの？」

僕は敬音をなだめるようにして

「ちゃんと病院行くからだいじょうぶだよ。敬音はどうして一人でお外に出たの？」

「ぱぱがねんねしてたからね」

「そつか……。今度からはパパを起こして。一人だと危ないですよ？」

敬音はゆっくりと頷いた。

僕は慌てて携帯を出し、ペットショップに電話を入れた。

ことのいきさつを話と、店長はかなりおどおどしていたようだった。

僕は、ちゃんと彼女が病院に行くように伝えて欲しいと、店長に念を押してから電話を切った。

「帰えろっか」

「うん」

僕は敬音を抱き上げ、「彼女にたいしたことがないように」と祈りながら、家に戻った。

僕は敬音を抱きかかえたまま、悠美が待つであろう自宅まで走って戻った。

玄関のドアを開けると、悠美はすごい勢いで駆け込んできたかと思うと、僕の腕の中の敬音を確認して、安堵の混ざった溜息をついた。

「・・・もう！！心配ばかりかけて！！」

悠美の瞳には徐々に涙が溜まり、今にも溢れ出しそうだ。

「敬音、ダメじゃない！！一人で勝手に・・・」

悠美は大きな声で、敬音を睨みつけた。

「もういいよ」

僕はそれを止めるようにして、言葉を挟む。

「敬音だって悪気があったんじゃないんだから。ちゃんと自分で悪いことをしたんだってわかってるよ。だから」

僕は敬音をそつと床に降ろすと、悠美をたしなめるように肩を摩擦た。

「まーくんは、敬音に甘すぎるのよ！！」

「もう終わりにしない？お腹減ったよ。ねっ。敬音？」

罰の悪い顔をしていた敬音も、僕の言葉でゆっくりと表情がほぐれていく。

「はいはい。もう・・・わかりました」

悠美はまだ言い足りない小言をブツブツと言いながら、キッチンへと向かっていった。

僕は悠美の姿が見えなくなったのを確認すると

「今日の交通事故のことはママには内緒だよ。もっと心配しちゃう

といけないからね」

そう敬音の耳元で囁いた。

敬音はにっこりと笑って頷いた。

何故こんなことを言ったのか、自分でもわからなかった。

ただ、悠美に彼女の存在を知られなくなかった。

僕は今頃病院に向かっているであろう彼女の姿を思い浮かべながら、彼女にたいしたことがないことを願うしかできない自分が齒痒くて仕方がなかった。

16・上手い言い訳

悠美と敬音は昼食を終え、子供部屋で昼寝をしていた。

僕は一人、ダイニングの天井を見上げて、彼女からの連絡を待っていた。

天上のプロペラがゆっくりと、僕の気持ちをかき回しているように思えた。

僕の中には言いようのない不安が胸いっぱいに広がり始めていた。

携帯を握り締めたままで、僕は2階の子供部屋に向かった。

ドアを開けると、既に敬音は柔らかい表情で眠りについていた。

そして、それにつられるようにして悠美もとうとうととしているようだった。

「悠美？」

僕は敬音を起こさないように、静かに悠美の肩を揺さぶった。

「ん？」

「あのさ、今日の準備大丈夫？買い忘れた物とかあったら、買ってくるけど」

「どこか行くの？」

「うん。そろそろ迎えに行こうかと思って」

今日は敬音の3歳の誕生日だ。

ペットショップにカノンを迎えに行かなくてはならない。

「でも、ちょっと早くない？」

「うん。でも、仔犬が来たら、一緒に遊びたいと思うんだ。だから、早めに連れてきて遊ばせておかないと、興奮して、夜寝ないと思う」

んだよね」

「そうね。じゃ、今のうちに」

僕はいつの間にか上手い言い訳を考えていた。

本当は彼女のことを心配で、気になって仕方がない。

ペットショップに行つて、そのことを早く確認したかっただけなのだ。

僕は、もう一度敬音の顔を覗き込んだ。

「もう少し寝てくれるかな？」

「あと1時間は大丈夫だと思うよ」

「じゃあ、それまでには連れてこないとね」

悠美は呆れたような顔をして、僕のほうを見て笑った。

「まーくん？彼女にでも会いに行きみたい。すごく嬉しそう」

僕は悠美の言葉で、揺らぐ気持ちを見抜かれているような、恐ろしさを感じた。

僕の頭の中では、既に彼女のことを溢れそうなほど浮かんで、かき消すこともできなくなっていた。

平然を取り繕うようにして、僕は悠美に笑いかけた。

「じゃ、いつてきます」

「はい。いつてらっしゃい」

悠美はそう言つて僕に手を振ると、もう一度敬音の隣で横になり目を閉じた。

僕は、玄関で靴ひもをしっかりと結び表に出た。

17・素敵な女性

春のすがすがしい風が、早く行こうと急かす僕の心を、宥めるように体全体に重なってくる。

太陽の光りが僕の心を透かして見ているようで、なんだか恥ずかしくなってきた。

駆け足というほどは早くはなく、早足では少し遅い……。そんなテンポで僕はあのお店に向かっていった。

いつもは10分かかかる距離が、今日は5分でついただろうか？

ガラス越しに、彼女の気配がないことを確認すると、僕は慌ててドアを開けた。

その先には、店長がきよとんとした顔で僕を見ていた。

「いらつしゃいませ。予定よりも早いですね」

「ごめんね。早いうちに連れて帰りたくなって」

僕は、何よりも先に彼女のことを知りたかったはずなのに、それを言い出せずにいた。

「いいえ、とんでもないです。今カノンちゃん連れてきますね」

「お願いします」

僕はそう言うと、店長の姿を見送ってから、店内をゆっくりと見回した。

「お待ちせしました」

店長は、高価な宝石を扱うようにして、ゆっくりとカノンを僕に差し出した。

「ありがとう」

店長は、僕の様子を見つめながら、細い目を線にして笑った。

「そう言えば……」

店長は申し訳なさそうに、上目遣いで僕を見た。

「彼女、玲香ちゃんから連絡はあった？」

僕は、店長の言葉の続きが待たなくて、急かすように問いかけた。

「はい。検査の結果も異常なしということで、連絡もらいました」

「そう……。よかった。敬音の為に悪いことしちゃった」

僕は、胸をなでおろした。

「五十嵐さんにお伝えくださいって、玲香ちゃんからの伝言です」

「そうなの？携帯番号教えただんだけど、迷惑だったみたいだね」

「そういう女性です。彼女は」

「そうだね。わかる気がする」

店長は、明らかに僕の顔色を伺っていた。

「五十嵐さん、変な事言いますけど……。玲香ちゃんは素敵な女性です。その……」

「え？」

僕は少し惚けたフリをした。

店長は僕の気持ちに勘付いている。

「私から見ても、素敵な女性です。これまでに会ったことのない人です」

（もしかしたら、店長は彼女のことを？）

僕はそう思うと、店長の顔がまともに見れなくなった。

「でも、真っ直ぐすぎて、素直すぎて、繊細なんです。ですから……」

店長はやっぱり僕の気持ちに気が付いている。

「わかってるよ。そんな気持ちじゃないから。心配しないで」
僕はそう言って、話の続きを遮ろうとした。

「玲香ちゃん、結婚してますし、お子さんもいますし・・・」

僕は店長の言葉に驚きを隠せずにいた。

「そうなんだ。でもホント、大丈夫だから」

「すみません。余計なこと言いました」

「ありがとう。確かに彼女は素敵だから、下手したら変な気持ちが生まれてたかもしれない。でも一応僕も既婚者ですから」

店長は僕の返事を聞いて、顔を真っ赤にして慌てていた。

「そうですね。本当にすみません。お気を悪くしないでください
ね」

店長は僕の言葉で安心したのか、照れ笑いをしながら、不ぞろいに
伸びた髭を摩った。

「それじゃ、カノン連れて行きますね」

「息子さんに気に入っていただけのことを祈っています」

「ありがとう」

「わからないことがあれば、何でもご連絡ください」

店長は深く頭を下げ、僕を見送った。

僕は小さなキャリアバックに入ったカノンを抱え、家へと向かって
歩き出した。

18 パースデープレゼント

僕は敬音を起こさないように、静かに玄関のドアを閉めた。家の中は静まり返っている。

僕は、フローリングの床を鳴らさないように、つま先を立ててリビングまで移動した。

リビングのドアを開けると、つけっぱなしになったテレビから敬音の大好きなCMが流れていた。

僕は急ぐあまり、テレビを消すこともせず、出かけていた。

リビングの奥に隠してあったカノンの新しい住まいを取り出し、準備を始める。

説明書にさっと目を通し、書かれている通りに組み立てる。

ただ、こうしている間も僕は彼女のことを思い浮かべていた。そんな自分にやるせなさを感じた。

さっき店長が言った言葉が引っかかっていたのも事実だ。

彼女は結婚をしていて子供がいる。

僕が踏み入れることのできない彼女の生活。

それを想像しただけで、胸の置くがキリキリと音を立てて痛み出す。

(今頃ちゃんとやすんでいるのかな?)

(何である時、彼女の番号を聞かなかつたんだろう?)

僕は自分の行動をひどく後悔した。

彼女から直接何事もなかったことを聞けば、もっと気持ちは和らいでいただろう。

ただ現実には、僕はこれ以上何もできない。

僕は様々なことを考えながら、カノンの住まいを完成させ、狭いキヤリーからゆつくりと移動させた。

カノンは小さな体をチヨコチヨコと動かし、短い尻尾を命一杯振っている。

僕に一生懸命に存在をアピールしてくるカノンが愛しくなる。

そして、真っ直ぐな眼差しで見つめるカノンの瞳が、今朝の彼女の瞳と重なり、切なさが募っていった。

「まーくん、帰ってたの？」

背後からの悠美の声に僕はドキリとして振り返った。

「うん。どう？カノン？可愛いでしょ？」

「ほんと。小さいね」

「敬音、きつと喜ぶと思うんだ」

「じゃ、起こしちゃおう？」

「僕が行くよ」

僕は敬音の喜ぶ顔を想像しながら、2階の子供部屋へと上がった。

敬音はまだ眠っている。

「敬音？」

僕は敬音を軽く揺さぶってみた。

「ばば？」

敬音は目をしきりに擦りながら、僕に視線を合せて、体を起こした。

「敬音、今日は何の日？」

「僕のお誕生日！ー！ー」

「プレゼントあるんだよ」

「ほんと?」

「うん。下に行って見ておいで。ママがいるから」

敬音はいつにない大きな声で『はい』と返事をしてから、バタバタとすごい音を立てて、階段を下りた。

「わぁー!」

敬音の声が階段の上り口まで聞こえてくる。

僕は敬音のリアクションが見たくなって、追いかけるように下へ降りた。

敬音は小さなカノンを抱えて、満面の笑みを浮かべていた。

「ぱぱ、かわいいね」

「そっでしょ?」

「敬音。パパにありがとうは?」

悠美に促され、敬音はカノンを抱えたまま

「パパありがとう」

そう言つと、すぐに視線をカノンに戻した。

「ちゃんとお世話してね」

悠美は敬音の様子を見て、少し呆れたようにそう言った。

「はい」

敬音は、右手を高く上げて返事をした。

「今日はいつもと違ってすごい返事なのね」

悠美はそう言つて苦笑いしながら、立ち上がった。

「お世話するのよ」

「はい」

敬音は、カノンの頭を撫でながら、半分上の空で返事をしているよ

うだった。

「この仔ね、カノンって名前なんだよ」

僕は、そついい終えると、また彼女のことを思い浮かべた。
香音^{カノン}……。

彼女から一字もらってつけた名前。

僕は不覚にもあの時から、彼女に好意を持っていたのかもしれない。

「カノン！！ぼくけいとだよ」

敬音はそう言つと、何時間もカノンを話さなかった。

19・自分だけのもの

昨日の敬音の誕生日は、あっという間に終わった。

でも、多くのことがありすぎて、一日が何十時間にも感じられたことも事実だった。

僕はまだ眠っている悠美を寝室に残し、リビングへと降りていった。

リビングに入ると、既に敬音が起きていてカノンとじゃれて遊んでいる。

「敬音、早起きだね」

「うん。カノンとあそびたいの」

「そっか・・・」

僕はソファーに腰を下ろすと、敬音とカノンの様子をしばらく見つめていた。

敬音の笑顔が、僕の心の中に染み込んで、癒してくれる。

「まーくん。カノン迷惑してるんじゃない？」

悠美はパジャマのまま僕を見下ろしてそう言った。

「おはよう」

僕はそう言ってから、もう一度敬音の様子を見た。

「そうだね」

悠美は僕の返事を聞くとすぐに

「敬音、カノンを離してあげなさい。あんまり抱っこばかりしていると、カノンに嫌われちゃうから」

「え？」

敬音は悠美の言葉に驚いたように僕を見た。

「そうだよ。敬音だっけとずっとパパやママに抱っこされてたら、何

にもできないし、嫌になんない?」

敬音は、僕の言ったことを理解したのか、静かにカノンを床に降ろした。

「いい子ね」

悠美はそういうと、髪をさつと一つに結び

「ご飯食べよっか」

そう言い残してキッチンへと向かう。

朝、いつもどおりの食卓。

コーヒーの香ばしい香りに包まれ、悠美が朝食ののったプレートを僕の前においてくれる。

敬音は自分専用の椅子に座り、自分の前にも同じように運ばれてくるのを静かに待っていた。

少し違うのは、カノンが来たことだけ・・・なはずだった。

「食べないの?」

「食べるよ」

「何考えてるの?」

「ああ・・・。ツアーのこと」

とりあえずその場を取り繕ってから、僕は目の前のトーストに手を伸ばした。

「いつからだっけ?」

「7月から8月まで」

「今回は短いんだね」

「うん。北澤の希望だね」

「そうなの。誠のわがままね」

悠美はそう言つと、小さな溜息をついた。

僕は口に出して、言ったことはないけれど、悠美が北澤を『誠』と

呼んでいることに、ずっと抵抗があった。

かと言って、悠美にそれをやめるように言ったとしても『何で？』
という返事しか返ってこないことはわかっていた。

男というものは不思議なもので、好きな女性の全てを自分だけの
ものにしたくなる。

でも北澤を『誠』と呼んでいる現実に、まだ悠美の全てが僕だけの
ものになっていない気がしていた。

そんな、どこか悲しい気持ちを僕はずっと心の隅に抱えていた。

20・マルの日

あれから僕は、ツアーの準備で毎日アタフタと過ごしていた。

数週間彼女と会わなければ、僕の想いも消えてしまつような気がしていた。

それでいいんだと思っていた。

でも、そんな風に思えば思うほど、彼女の存在が気にかかり、想いは膨らみ続けた。

僕は手帳を広げ、ツアーまでの日程を確認していた。

すると、今日の日付にマルが付いていて、矢印で引いた先に、小さく殴り書きした自分の文字を確認した。

そくだ！今日はカノンのトリミングの予約の日だった。

僕はなぜか浮かれていた。

「今日は早めに切り上げてもいいかな？」

雄太が少し驚いた顔をした。

「ナンだ？珍しいな。マサがそんなこと言うなんて」

「奥さん怖いもんなあ」

林原も一緒になって僕のほうを見た。

「違うよ……。今日は犬のトリミング……」

北澤は僕の言葉を最後まで聞かずに、噴出した。

「お前、悠美に相手にされなくなつて、犬に走つたのか？」

「何とでも言ってくれよ」

僕は半ばあきらめムードで、北澤の返事を待った。

そんな間も、僕の頭の中には彼女の優しい笑顔が浮かんでいた。

「じゃ、今日は早めに切り上げようぜ。俺、飲みにでもいこ」
「悪いね」

「いいよ。1週間以上詰めてきたから、息抜きも必要だよね」
陽一もにんまり笑っている。

「俺、買い物行きたかったんだよね」
「俺も行くわあー」

「来なくていい!!」

北澤と、陽一がじゃれあうのを、他のメンバーが、少し覚めた目で見ていた。

「さっさとやって、さっさと終わろうぜ!!」

「ラジャー」

「了解」

「ほーい」

林原の言葉を合図に僕達は、一旦曲の流れを確認してから、明日の開始時間を決め解散した。

21・イメージ

僕はスタジオを慌てて飛び出し、車を走らせた。

(今日は道が空いてるし、ちゃんと着けそうだな)

そう思った途端、見覚えのある交差点で信号につかまってしまった。

そこはいつも僕が利用してる、アクセサリーショップの前だった。

僕はふと思い立ち、車をアクセサリーショップの裏の駐車場まで進ませた。

彼女に何かできることはないだろうか、あの日からずっと考えていた。

なのに何も思い浮かんでこなかった。

僕は車を降りると、いつものように裏口のドアを開けて中に入った。

「五十嵐さん、いらっしやい」

専属デザイナーの山下さんが僕に挨拶をした。

「ちょっと、欲しいものがあるんだけどいい？」

「ええ。どんな感じの？」

「ちょっと、お世話になった女性にお礼がしたくて」

「わかりました。じゃあ、いくつか持ってきます」

彼はそう言うと、さっと席を立ち店内へと入っていった。

彼のデザインは斬新ではあるが、優しさや繊細さが交わってつけているだけで気持ちいい。

まるで……。

彼女のようにだ。

「お待たせです」

彼はそう言っていると、僕の前に5つのペンダントを並べてくれた。

「イメージがあれば言ってください」

彼の言葉に僕は即答した。

「あのね。桜みたいな柔らかい感じの……。ある？」

「ありますよ。ちょうど昨日、そんな感じで作ったのが!!」

「それ見せてもらっていい？」

「今もつてきます」

僕は彼が戻るまで、目の前のペンダントを眺めていた。

どれもお洒落なデザインに仕上がっている。

でも、トップが微妙に大きくて、彼女の魅力がかき消されてしまう気がした。

「これです」

彼が差し出したペンダントを見て、僕は何かを感じた。

「これ、包んでくれる？プレゼントだから」

彼はにっこりと頷き、また店の中へと戻っていった。

僕は、あのペンダントをつけている彼女の姿を思い浮かべていた。

ピンクの小さな石がちりばめられていて、トップがゆらゆらと優しく揺れる。

彼女のイメージにぴったりだった。

僕は彼女の喜んだ姿をイメージしながら、ラッピングが終わるのを待っていた。

「五十嵐さん、あのタイプのメンズもありますよ。どうですか？」

「そうなんだ。見てみたいけど、今日はちょっと慌てるから」
「わかりました。結構いい出来ですから、また時間のあるときでも」
「そうさせてもらおうよ」

僕はドアの向こうでラッピングが仕上がるのを首を長くして待っていた。

「おまたせしました」

お店の男の子が、小さな袋に入ったペンダントを持ってきてくれた。

「ありがとう」

僕はそう言つと、袋を受け取り、お店を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9805e/>

G I F T ・ 雅弘編

2010年10月24日13時32分発行